

【原著】

広島文教女子大学におけるコモンルーブリック 開発と実践的展開

今崎 浩・溝渕 淳

Development and Practical Approach of Common Rubric
in Hiroshima Bunkyo Women's University

Hiroshi Imazaki and Jun Mizobuchi

Ⅰ ルーブリックを取り巻く状況

2012（平成24）年8月に公表された文部科学省中央教育審議会の答申「新たな未来を築くための大学教育の質的転換にむけて～主体的に学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～」では、大学教育の改善およびその質保証のツールのひとつとして、「ルーブリック」が挙げられた。ルーブリックとは、「学修評価の基準の作成方法の一つであり、評価水準である『尺度』と、尺度を満たした場合の『特徴の記述』で構成」されている。そして、「記述により達成水準等が明確化されることにより、他の手段では困難なパフォーマンス等の定性的な評価に向くとされ、評価者・被評価者の認識の共有、複数の評価者による評価の標準化等のメリットがある」とされている（※1）。

ルーブリックが「パフォーマンス等の定性的な評価に向く」こと、そして教育の質保証のツールとして示されたことは注目すべき点である。これは、穴埋めや多肢選択などのいわゆる「客観テスト」による評価で事足りるような知識偏重の学びだけでは、教育の質保証が達成できないこと、そして、学生の「こころのありよう」や「パフォーマンス（技術）」といったものを評価していく仕組みを確立することが、今後の高等教育の質保証において重要な位置づけにあることを示している。

ルーブリックの基本的なものは、学びの具体的な到達目標である①評価規準と、この評価規準の達成の度合いに応じ、どの程度評価するのかについての特徴を記述した②評価基準を設定し、両者を掛け合わせたマトリクスとして示される。杉森公一は、このルーブリックは教員だけで作成するものではなく、他教員やTA（ティーチング・アシスタント）、さらには学生とともに作成され、課題が提示される前に学生と共有されることが重要であると述べている。評価規準と評価基準のそれぞれにおいて、教員と学生が相互に理解し、納得していることが公正な評価を担保することにつながっている（※2）。

全米カレッジ・大学協会（AAC & U）では、協会加盟校での諸実践をもとに共同研究を重ね、汎用ルーブリックである「VALUE ルーブリック」を開発した。そこでは教養教育を通して形成されるべき能力が15項目提示され、それぞれにおいてルーブリックが作成されている。15領域は①探究と分析、②批判的思考、③創造的思考、④文章コミュニケーション、⑤口頭コミュニケーション、⑥読解、⑦量的リテラシー、⑧情報リテラシー、⑨チームワーク、⑩問題解決、⑪市民参加、⑫異文化知識・能力、⑬倫理的推論、⑭生涯学習の基礎とスキル、⑮統合的学習

となっている。このうち、①～⑩は知的・实际的スキルを、⑪～⑭は、個人的・社会的責任を、⑮については単独で統合的・応用的学習という形でカテゴリ化されている（※3）。すでに、この VALUE ルーブリックを参照しながらルーブリックを提示し、運用している日本の大学も存在している。

松下佳代は VALUE ルーブリックの特徴として、メタルーブリックとしての性格を有している点を挙げている（※4）。全米カレッジ・大学協会に属する各大学の実践の中で開発されたこのルーブリックは、あくまでも協会に属する諸大学におけるルーブリックを方向付けるものでしかない。諸大学はそれぞれの学科や科目の文脈にあわせてそれらをローカライズすることが可能となっている。つまり、これらの VALUE ルーブリックはあくまでもジェネリックな、あるいは最低基準のようなものであり、これをベースに各大学や学科がスペシフィックな形で柔軟にローカライズし、教育活動に活用させていくことができるのである。

2 本学の状況

本学では1つの学部の中に、一部重複する部分があるものの、基本的には専門領域を異にする5つの学科が属している。その結果、学びの内容や授業の形態もさまざまであり、成績の評価基準が多岐に及ぼざるを得ないことが容易に予測できる。実際、学科ごとで学生の GPA 値に明らかな差が見られることがこれまで報告されている（※5）。

加えて、本学に限ったことではないが、社会の中で専門的な力を発揮することのできる人材の育成を掲げる教育機関では、学部や学科の教育活動の目標の1つに、学生による国家資格等の諸資格の取得およびその合格率の向上を掲げていることが多い。しかし、これらの資格の取得に向けた国家試験等の多くが「客観テスト」の形で実施されている。したがって、教員や学生、保護者においても、また、社会的な評価という面からも、大学における学修の成果の1つとして考えられている「国家資格等の取得」というものが、最終的には「客観テスト」の結果によってのみ問われてしまうという現実がある。そしてこのことは、各学部や学科の学修活動が、知識偏重の教育を展開せざるを得ないリスクと常に隣り合わせであることを示している。

その一方で、これら資格取得のためのカリキュラムには必ずといってよほど「実習科目」が用意されている。実習科目では学びの成果として「こころのありよう」や「パフォーマンス（技術）」にウエイトが置かれている。さらにその多くは、資格取得のための試験受験に必修であるため、「すでに単位取得していること」が前提となっている。したがって、多くの資格取得に関する教育活動においては、「こころのありよう」や「パフォーマンス（技術）」の教育や評価について、教育機関がその全ての責任を担うこととなる。そこでは、「こころのありよう」や「パフォーマンス（技術）」について、どのような性質のものを求め、育て、送り出すのかということに関して、社会に対して明確な説明責任を果たしたり、教育機関としての方針（ポリシー）を示したり、さらには公平かつ厳格な評価を行ったりする必要性が生じる。

一方、実習科目において公平かつ厳格な評価を行うことには困難が伴う。実習の学修には大学の教員はもちろん、実習先の指導者による教育や評価の影響力も大きい。そのため、指導者の主観が反映しやすい状況であり、結果として、実習の評価が必ずしも一様ではないものとなりがちである。このような問題意識のもと、昨年本学では教育実習におけるルーブリックが開発され、その効果の検証が行われている（※6）。さらには、4年間の大学における学びの成果であるところの卒業研究についてルーブリックを作成し、全学科において共通の評価基準を適用することによって、公正な評価の実現へ向けた取り組みを継続してきた。

3 コモンルーブリックの開発

このような経緯のもと、今年度は、本学における教育活動の充実にむけ、学修のさまざまな局面で活用できるコモンルーブリックを開発し、一部運用することが目指された。コモンルーブリックとは、その名の通り、共通に用いる評価の指標のことである。その活用が、本学の1学部5学科という状況から生じる評価分布の偏りを標準化していく上で有効であることが想定される。

今回開発したコモンルーブリックは、全ての学科に適用可能な内容を模索した結果、また、試行段階であることも踏まえ、学生の基本的な表現力の評価基準を作成することにした。具体的には、学期末レポートや毎回授業内で提出が求められる小レポート等に活用するための①「レポート作成」と、ゼミでの発表や実習報告等に活用するための②「発表」の2つのコモンルーブリックである。評価基準や評価基準の検討にあたっては、他大学の先行事例の動向を踏まえつつ、専門的な分野に特化されておらず、ジェネリックな性格を有しているため、5学科に共通するコモンルーブリックの内容に親和性が高いと考えられることから、VALUE ルーブリックの「文章コミュニケーション」および「口頭コミュニケーション」に示されている内容を参照した(※7)。

作成のプロセスとしては本学教務委員会内で原案を提示したのち、各学科に意見を寄せてもらう形で完成させた。当初案ではテクニカルな面(例えば誤字・脱字や目線・声の大きさなどといったもの)への評価が占めるウエイトが多かったが、文章や発表の内容の質にウエイトを置く形に改めた。また、当初は評価のポイントを項目化し、達成できている項目の数で評価に差が生まれるような形を取っていたが、質的なものを量的なものに還元することになってしまふとの意見を踏まえ、採用しなかった。結果、暫定的なものとして、表1のようなコモンルーブリックを作成した。表1を見るとわかるように、①テクニカルな部分よりも内容を重視していること、また、②文章を読んだり、発表を聴いたりする相手に対する配慮がなされているかを評価していることが特徴として挙げられる。

4 今後の展開

本学におけるコモンルーブリックは試行段階であり、現時点では教員の任意による活用にとどまっているが、このコモンルーブリックの開発と活用を端緒に、今後本学の教育活動の充実に向けたさまざまな展開を予想することが可能である。以下ではそれらを挙げていきたい。

4.1 教育の実質化の促進

すでに本学では、カリキュラムマネジメント実践を通して、教育目標が体系化されている(※8)。しかし、例えば「育心目標」や「実践目標」などについて、これらがどの程度達成されているのかを評価することには、ある程度の困難が生じることが予見された。しかし、ルーブリックは「ころのありよう」や「パフォーマンス」のような定性的な評価に向いているため、今回の一部運用をきっかけとして、本学の教育目標に則したコモンルーブリック開発、およびその結果としての教育の実質化が促進されることが期待される。

本学におけるコモンルーブリック開発においては、ジェネリックな性格を有するメタルーブリックとしてのVALUE ルーブリックを参照したが、前述の通り、これらは学修の基礎をなす項目であるにもかかわらず15項目もの多岐にわたっている。さらに、これをベースに、各教育

表1 コモンループリック

レポート作成用コモンループリック

下表に示す3つの観点により評価する。

	課題に対する内容	論理的な説明	文章表現
観点の説明	課題の内容を的確に捉え、問題意識（仮説）や筆者の主張が明確に伝わる形で考察されている。	裏付けとなる情報（資料や根拠）を適切かつ効果的に選択し、論理的に一貫した説得力のある探究がなされている。	適切な段落付け、句読点の付け方、主述の対応、文体の統一、誤字脱字や仮名遣いの間違いがないかなど、文章表現が適切である。
レベル3	課題の内容が理解された上で、問題意識（仮説）や筆者の主張が明確で、しっかりと考察がなされている。	裏付けとなる情報を提示した上で、論理的に一貫した正確かつ説得力のある探究がなされている。	文章の体裁が整えられ、慎重かつ丁寧に推敲されており、違和感なく平易に読み進めることができる。
レベル2	課題への理解や問題意識（仮説）、筆者の主張が明確である。	裏付けとなる情報が提示され探究に活かされており、論理的な説明がなされている。	文章の体裁が整えられ、推敲がなされていることがわかる。
レベル1	課題や問題意識（仮説）、主張が整理できているが、あまり明確ではない。あるいは他者の意見に沿ったものとなっている。	裏付けとなる情報の提示が十分ではないため、論理性に欠け、探究が不十分なものとなっている。	文章の体裁を整えたり推敲したりといった作業が不十分である。
レベル0	論点や情報の整理が十分ではなく、内容が伝わってこない。自らの意見が述べられていない。	裏付けとなる情報の意味を取り違えていたり、情緒的な文章が続いたりし、論理性のない探究となっている。	文章の体裁を整えたり、推敲されたりしていないため、読みにくい文章となっている。
備考		裏付けとなる情報とは、授業の中で説明された内容や、大学、公的機関、学会、各種団体、新聞などの情報、さらには自らの体験などを含む。	

発表用コモンループリック

下表に示す2つの観点より評価する。

	内容の構成	情報の伝達
観点の説明	発表を通して伝えたい内容（論点や主張）が明確に伝わり、説得力のあるものとなっている。	発表の際に活用する資料（レジュメや図、統計等）や言葉の選び方、姿勢、ジェスチャー、アイコンタクト、声などの各種表現が発表を説得的かつ効果的なものになっている。
レベル3	内容の構成が適切であるため、論点や主張が明確かつ印象的であり、かつ、説得力があるものとなっている。	資料が適切かつ効果的に活用・提示され、適切な表現がなされているため、発表が効果的かつ説得的なものとなっている。
レベル2	論点や主張が明確であり、内容の構成に一貫性が見られる。	資料の提示や各種表現が適切であり、発表を効果的なものになっている。
レベル1	論点や主張について整理できているが、明確に伝わらない。また、内容の構成にも改善が必要である。	資料の提示が不十分であり、あるいは、表現が単調なものとなっているため、効果的な発表になっていない。
レベル0	論点や情報の整理が十分ではなく、内容が伝わってこない。	資料や言葉の選び方が不適切であり、各種表現が発表の理解を妨げるものとなっている。
備考		

機関の特性に応じてローカライズされることが想定されている。このローカライズの方法は2つある。1つ目は教育機関の特性に応じて、15項目のうち特に力を入れたい部分に特化させる方法である。例えば、①～⑩の知的・実地的スキルと⑪～⑭の個人的・社会的責任のどちらの κατηγοリーを優先するかであるとか、あるいは、①～⑩の知的・実地的スキルの中でも特に⑦量的リテラシーや⑧情報リテラシーに力を入れていく、といった形である。このように、どの項目に力を入れるかの違いがそのまま、教育機関の性格づけ、いわばアイデンティティそのものとなる。

2つ目は、15項目があくまでもジェネリックなものであるため、それぞれの項目について、求められる力をより細分化・特殊化し、それらに関するルーブリックを作成するという方法である。同様の専門分野について教育活動を実施する場合であっても、細分化・特殊化されたルーブリックの具体的な内容が、他機関との差異を生じさせる。結果、その教育機関のアイデンティティ形成に貢献することになる。

さらに、この2つのローカライズの方向性は結局のところ、両立させていくことが望ましい。つまり15項目のうち教育機関の教育目標に沿った形でいくつかの項目に焦点を絞るとともに、それをより細分化・特殊化し、そこで求められる具体的な内容を明示することで、教育機関のアイデンティティが(他の機関と差別化が図られた上で)確立するとともに、その存在意義について社会に説明責任を果たすことも可能となるのである。

今後、本学においては、今回の「レポート作成」「発表」に関するコモンルーブリック導入をきっかけとして、学科を問わず、大学として学生にどのような力を修得してほしいのかについて検討する必要がある。その上で、コモンルーブリックの内容をベースに、各学科の専門的な学びに沿って特化させた形で、学生に修得してほしい力を検討し、ルーブリックを作成していくことになる。以上のプロセスを通し、本学のアイデンティティ、あるいは教育機関としてどのような社会的責任を果たしていくのが明確になる。ひいては、真の教育の実質化が実現することとなるであろう。

ルーブリックの体系化は、先述した本学のカリキュラムマネジメントの体系とパラレルなものであることは言うまでもない。大学全体の「教育目標」がコモンルーブリックに対応し、「学科目標」がローカライズされたルーブリックに対応する。今後、本学におけるコモンルーブリックの明確化とそれに基づく学科ごとのルーブリック確立により、カリキュラムマネジメントがより具体的なものとして機能するといえる。

4.2 教育接続ツールとしてのルーブリック

杉森は、教育活動の様々なレベルや段階の中で、現在、教育接続に関する課題が生じていると指摘している(※9)。例えば入学試験や国家試験、就職試験などが十分な機能や役割を果たしているのかについて、先述の通りこれらが未だに「客観テスト」中心のものとなっている現状に鑑みると、疑問を抱かずにはいられない。

折しも高大接続の重要性が叫ばれており、2014(平成26)年12月には中教審より「新しい時代にふさわしい高大接続の実現に向けた高等学校教育、大学教育、大学入学者選抜の一体的改革について」という答申が出されており(※10)、本学も入試改革に取り組む中でその実現を模索する途上にある。今後は中学・高等学校から大学への接続に止まらず、大学から社会における職業生活やキャリアパスに至るまで、ルーブリックの適用範囲が拡大・延長することが予想される。そして、それぞれの接続点では、到達目標の内容と質がルーブリックの形で可視化され、説明責任が果たされる形で擦り合わされていくことが求められる。

以上のような教育段階の経時的な、いわば「タテ」の接続は、大学内部においても求められるだろう。例えば初年次教育や教養教育と専門教育との接続、あるいは、学部教育と大学院教育の接続段階においても、ルーブリックの存在が大きな役割を果たすと考えられる。一方、「ヨコ」の接続の面でも、共通の評価規準・基準を共有したり開発したりする活動を通して、例えば各学科の専門教育におけるカリキュラムの中で、個々の科目の連携が図られたり、さらには非常勤の教員も含めた授業担当者の相互連携が促進されると考えられる。すなわち、それぞれの学科におけるルーブリックの開発という活動が、組織的なFD活動の促進に大きな役割を果

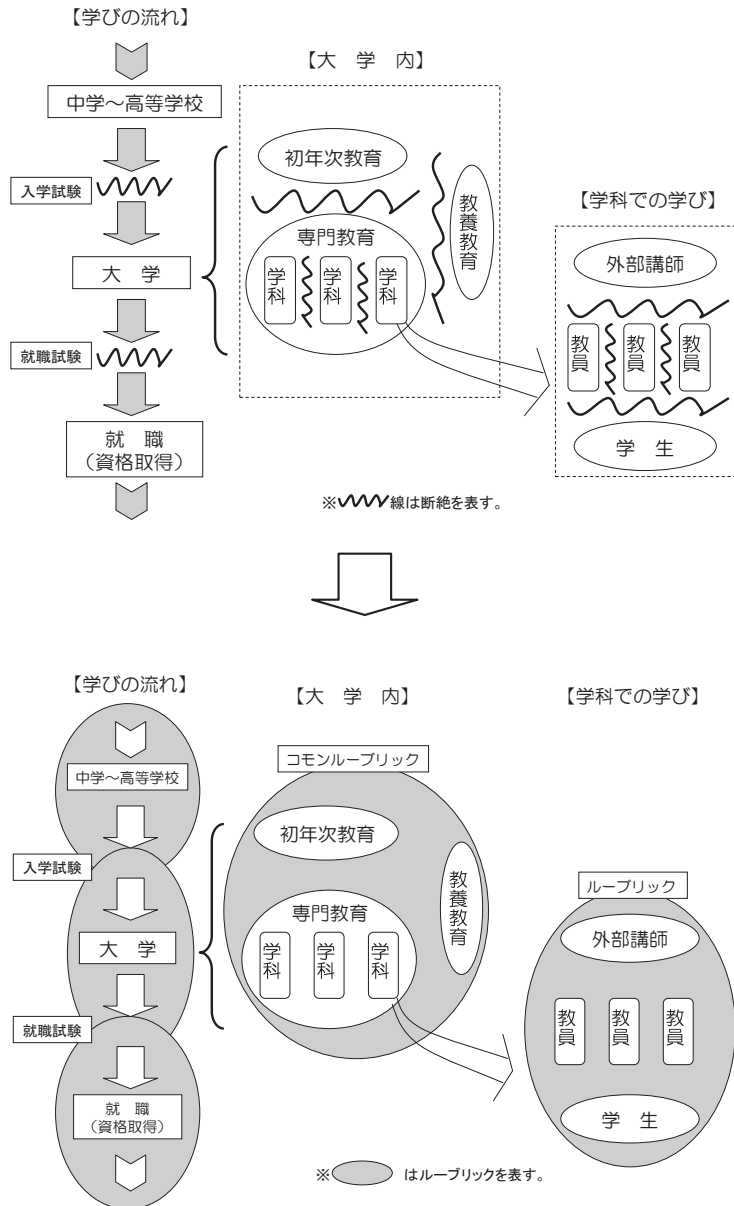


図1 接続ツールとしてのルーブリック

たすことになる。

タテの接続は、大学における「アドミッションポリシー（入学者受け入れの方針）」から「ディプロマポリシー（学位授与の方針）」までの、一連のプロセスをどのように設定するのかということと無縁ではない。また、ヨコの接続の実現は、結果として、大学における「カリキュラムポリシー（教育課程編成）」策定に大きく関わってくることになる。これらの結節点にルーブリックが活用されることになり、大学における「アセスメントポリシー（学修成果の評価の方針）」確立にも直結していく。これらは図1のように示される。

4.3 アクティブ・ラーニングとルーブリック

2012（平成24）年8月の質的転換に関する答申では、ルーブリックとともに、アクティブ・ラーニングの導入についても言及がなされている。学修者が主体的かつ能動的に授業に参加したり、教員と学生の双方向性を確立していったりする場合においても、ルーブリックが有効に活用できると考えられる。

ルーブリックを用いた評価においては、評価の規準や基準を学生にしっかりと説明し、共有することが必須となる。従来、学生に対する成績評価の基準はいわゆる「ブラックボックス」化しがちであった。しかし、ルーブリックを用いてそれらが説明・共有されることが実現することによって、教員が学生に期待する学びの到達点が学生によって理解され、主体的に自らを高めていく学びへの動機付けをもたらすことになる。また、成績評価について、教員から学生に対して、その評価の規準や基準に照らして説明責任を果たすことが可能となる。説明を受けた学生は自らの到達度を自覚するとともに、それらを克服するための学びの意欲をさらに高めていくことになる。以上のようなプロセスはすべて、教員と学生の共同による、双方向のやりとりの中で行われていく。

さらには杉森の言及にも見られるように、ルーブリックの開発が教員同士だけでなく、学生との共同によって行われる点も注目したい（※11）。ルーブリックは規準や基準を提示するものである以上、ある程度固定化し、かつ、継続して活用することが望ましいと捉えられがちである。しかしそうではなく、ルーブリックはむしろ柔軟性・可変性に富むものである。実際コモンルーブリックを導入している教育機関においても、これまで何度も見直しが行われバージョンアップが行われていることがわかる（※12）。

例えば教育活動を行っている際、学年ごとに能力の違いを感じることもある。あるいは、当初の目標値よりも学生の力が伸びていることが確認できる場合も少なくない。また、教員の側でも、学生との関わりや個人の研究の進捗状況により授業の内容を変化させたり、より高度なものにしたりということが生じる。このように教育活動は、教員と学生の相互作用の中で不断に変化し続けるという性格をもっている。そのため、ルーブリックの内容がその都度変化するということは、教員と学生の相互作用が頻繁に行われていることのエビデンスになっているともいえるのである。

もちろん、ルーブリックの変化が教員の一方的な判断で行われているのであれば問題である。なぜならその変化のプロセスがブラックボックスとなっているからだ。しかし、ルーブリックの作成は教員と学生とのオープンな共同作業であることが前提であり、その作成と改善のプロセスに学生が参加し、情報を共有し、理解を深めていることが担保されている限り、ルーブリックがその都度柔軟に変化することについて何ら問題は生じないように思われる。むしろその活動はよりよい教育を展開する上での、学生と教員の共同による授業改善やFD活動にも拓かれていく。学生が自ら受講している授業の評価規準等の作成に参画すること、さらにはそこで双

方向のやりとりが繰り返されることは、その授業の進め方や内容などについて、学生がダイレクトに授業評価を行う場としても機能するからだ。

以上のように、ルーブリックを適切に運用することそのものが、アクティブ・ラーニングと親和性の高いものだといえ、これらが相乗効果を起こす中で教育の質保証もより促進されていくと考えられる。

5 ルーブリックのもつ創造性

現在、一連の教育の質的転換が、文部科学省や産業界の要請に基づくものであるとの批判も多く見られる。しかしながら、例えば各大学のルーブリックの規準や基準までもが文部科学省や産業界によって方向付けられ、決定されるとは考えにくい。むしろそれらは教育機関や教員、学生において創造されるものである。そのような意味においては、大学におけるルーブリックの活用および評価規準や基準の確立は、大学の自立性を確保する手段とも考えられる。ルーブリックに限らず、これから各教育機関は自らの教育理念などもあわせ、そのレゾナードルに改めて向き合わざるを得なくなるであろう。

ルーブリックは表1のようなマトリックスによって示されることから、性質を評価すると謳いながらも、実際のところは人間をカテゴライズしたり規格化したりするのではないかという危惧もある。あるいは、いわゆる「規格外」の存在や人間の創造性のようなものを評価できないのではといった心配もある。実際、本学でコモンルーブリックの内容を検討した際に、学生のオリジナリティを評価の観点に入れていきたいとの要望が少なからず見られた。また、成瀬尚志のように、学生のオリジナリティをルーブリック化する研究なども存在している（※13）。

しかしながら先述の通り、ルーブリックはむしろ柔軟かつ変化に富むものである。また、その変化のプロセスにおいては教員や学生による、時には双方の立場を超えたある種の「開かれた対話」が実現する。そのような意味においては、ルーブリックを導入した教育の展開は、人間を規格化するのではなく、むしろその創造性を育み発揮させる場として機能すると考えることができるのではないだろうか。

次節以降では本学におけるコモンルーブリック活用の事例を報告する。ルーブリックをローカライズし、その信頼性と妥当性を追求するプロセスにおいて、教員と学生によるアクティブ・ラーニングが展開されるとともに、学生の主体的な学びの姿勢が促進されている。本学におけるルーブリックの導入はまだ初期段階であるが、一方で今後を見据えた大きな視野を持ちながら、また、もう一方で本事例のような緻密な実践と検証を継続しながら、今後も教育の質的転換を推進していきたい。

6 コモンルーブリックを用いたレポート評価の実践

本学において、今年度コモンルーブリックの開発に取り組んできた経緯については、これまでに述べられてきたとおりであるが、はたしてそのコモンルーブリックが信頼のおける妥当なものであるかについては、絶えず問い続けなくてはならない。すなわち、実践を通して、その成果を反省し、妥当性と信頼性を高めていく作業を連続的に行っていく必要がある。

ここでは、本学の教職科目「特別活動指導法Ⅰ」において、今年度開発したコモンルーブリックを用いたレポート評価の実践、そして、その成果と課題を述べることにする。

この授業は小学校教諭免許の取得を目指す学生を対象とした科目で、小学校における特別活

動の指導方法について講義を行い、レポート、学習指導案、事前・事後学修の状況によって評価を行っている。担当教員は1名で、今年度は初等教育学科2年次の学生75名が履修している。

7 コモンルーブリックのローカライズ

松下（2114）は、「VALUE ルーブリックを用いた評価の手続きでとくに重要なのは、ルーブリックのモディフィケーション（modification：修正）とキャリブレーション（calibration）である」と述べている（※14）。

VALUE ルーブリックとは、各大学のルーブリック開発の元となるもので、大学間で共有されるルーブリックのことを指し、各大学内で共有されるコモンルーブリックとは、その役割や評価基準の記述の抽象度は異なるものであると言われている。しかし、学科や科目を超えて、複数の評価者が用いるという点では共通しており、コモンルーブリックを用いる際にも、学科、科目にあわせて、モディフィケーション（modification：修正）とキャリブレーション（calibration：調整）の作業を行うこと、すなわちコモンルーブリックのローカライズが必要であると考ええる。

モディフィケーションについて、松下（2114）は次のような形で行われると述べている。

- ・ VALUE ルーブリックのうち必要なルーブリックだけを選択する。
- ・ 規準やレベルはそのまま、記述語の表現を変える。
- ・ 記述語に加えて、規準やレベルの表現も変える。
- ・ 規準やレベルを削ったり、加えたりする。
- ・ 複数の VALUE ルーブリックを組み合わせて、新たな1つのルーブリックを作る。

また、キャリブレーションについて、松下（2014）は次のように行われると述べている。

- ・ ルーブリックを読み合わせ、解釈を共有する。
- ・ 学生の作品事例を用いながら、1つの規準（または1つのレベル）について各自が採点する。
- ・ 採点終了後、参加者は、自分の採点の根拠について作品の該当箇所を引きながら説明する。
- ・ 以上のことを少なくとも2つの作品事例で行う。

ただし、こうした作業をコモンルーブリックを用いる際にも行うか否か、また、行うとすれば、どのように行うのかについては、今後学内での議論と共通理解が必要であると言えよう。今回の実践では、コモンルーブリックを初めて目にする学生が目標、すなわち何に取り組んだらよいかを確実につかむことができるようにすることを意図して、モディフィケーションを次のとおり行った。

- ・ 評価規準「課題の内容を的確に捉え、問題意識（仮説）や筆者の主張が明確に伝わる形で考察されている」を踏まえ、「与えられたテーマから疑問や問題を見いだしている」と「自分の考えをもち、その考えを支える情報を踏まえ、最終的な結論を導いている」の2つの評価規準を設けた。
- ・ 評価規準「適切な段落付け、句読点の付け方、主従の対応、文体の統一、誤字・脱字や仮名遣いの間違いがないかなど、文章表現が適切である。」を踏まえ、「話題の選択から結論に至る過程を的確に説明している。」と「文法に沿った正しい日本語を用いて適切にレポートを作成している。」の2つの評価規準を設けた。

表2 特別活動指導法 I レポート評価ルーブリック

観点の説明	課題に対する内容		論理的な説明	文章表現	
	与えられたテーマから疑問や問題を見いだしている	自分の考えをもち、その考えを支える情報を踏まえ、最終的な結論を導いている	自分の考えを支える情報（資料や根拠）を適切かつ効果的に選択し、論理的に自分の考えを述べている	話題の選択から結論に至る過程を的確に説明している	文法に沿った正しい日本語を用いて適切にレポートを作成している
レベル3 (4)	与えられたテーマから自分の話題を設定し、その問題を取り上げた理由や背景について明確に述べている	自分の考えを支える情報を十分に考察し、最終的な結論を導いている	自分の考えを支える情報（資料や根拠）を適切かつ効果的に選択し、論理的に自分の考えを述べている	話題の選択から結論に至る論理的な組み立て、記述の順序、段落のつながりが整っている	<ul style="list-style-type: none"> ・主語と述語の対応が適切である ・誤字や脱字、仮名遣いの誤りがない ・引用した箇所が分かり、レポートの最後に引用文献を記載している
レベル2 (3)	与えられたテーマから自分の話題を設定しているが、その問題を取り上げた理由や背景の内容が不十分である	自分の考えや最終的な結論は述べられているが、自分の考えを支える情報の考察が不十分である	自分の考えを支える情報（資料や根拠）を示し、論理的に自分の考えを述べている	話題の選択から結論に至る過程はおおむね整っているが、記述の順序や段落のつながりに問題がみられる	<ul style="list-style-type: none"> ・主語と述語の対応が適切でない箇所が散見される ・誤字や脱字、仮名遣いの誤りが散見される ・レポートの最後に引用文献を記載している
レベル1 (2)	与えられたテーマから自分の話題を設定しているが、その内容が十分に整理できていない	自分の考えや最終的な結論が明確に述べられていない	自分の考えを支える情報（資料や根拠）が十分に示されていない	話題の選択から結論にいたる過程に問題がみられる	<ul style="list-style-type: none"> ・主語と述語の対応が適切でない箇所、誤字や脱字、仮名遣いの誤りがみられ、誤解を与える恐れのある文章が多い ・レポートの最後に引用文献を記載していない
レベル0 (1)	与えられたテーマから自分の話題が設定されていない	自分の考えや最終的な結論が述べられていない	自分の考えを支える情報（資料や根拠）の意味を取り違えていたり、情緒的な文章が続いたりする等、論理性に欠ける	話題の選択から結論に至る過程の理解が難しい	<ul style="list-style-type: none"> ・主語と述語の対応が適切でない箇所、誤字や脱字、仮名遣いの誤りがみられ、理解が難しい ・レポートの最後に引用文献を記載していない ・字数の下限が守られていない
備考			<p>自分の考えを支える情報（資料や根拠）は、「なぜなら」、「例えば」等と表現する</p> <p>自分の考えを支える情報（資料や根拠）とは、授業で用いたテキスト、大学、文部科学省等の公的機関、学会、各種団体、新聞等からの情報、さらには、自らの体験を含む</p>		引用した箇所は「」を用いて表現する

・記述語の表現を具体的なものに変更した。

こうしてローカライズしたコモンルーブリックが表2である。(以下、ローカライズしたコモンルーブリックは「ルーブリック」と呼ぶ。)

また、キャリアレーションについては、担当教員が1名であることから、担当教員自身が10本のレポートを採点した後に、特徴的な記述について、どのレベルとするかを検討し、決定した。しかし、担当教員が既にルーブリックについて説明をしていること、学生がレポートを作成していることから、ルーブリックの記述語の表現は変更せず、評価結果を学生にフィードバックする際に説明を行うこととした。

8 実践の具体的な内容

8.1 学生に対するルーブリックの説明

特別活動指導法Ⅰは全15回で計画されている。学生への説明は第13回(平成27年12月16日)の授業の終末で行った。

説明の主な内容は、次のとおりである。

(1) レポート課題等の提示

学生には、以下の課題を示すとともに、提出期限は第14回(平成28年1月13日)とし、第15回(平成28年1月20日)に評価結果をフィードバックすることを伝えた。

特別活動は学校生活の満足度や楽しさと深く関わっているが、他方、それらが児童の能力や態度の育成に十分つながっていない状況も指摘されている。

今後、小学校の特別活動において、どのような能力や態度を育成していったらよいか、また、その能力や態度を育成するためにどのような活動を重視していけばよいか、あなたの考えを述べなさい。

(2) ルーブリックの説明

表2「特別活動指導法Ⅰレポート評価ルーブリック」を配付し、「目標(何を学習すればよいか)」、「到達度(どこまで到達できているのか)」を把握し、主体的な学修を進めてもらいたいというルーブリックを用いた評価の趣旨と、ルーブリックの記述について説明した。

8.2 レポートの評価

前述のとおり、レポートの評価にあたっては、担当教員がキャリアレーションを行った。

ここでは、ルーブリックの各評価規準について、レポートに見られた特徴的な記述を挙げ、どのような評価にしたかを述べる。

(1) 評価規準「与えられたテーマから疑問や問題を見いだしている」について

私は、今後の特別活動において、児童が積極的に自分の意見を言うことができる能力と、児童が自ら問題を見つけ解決方法を導き出そうとする態度の育成を目指していきたいと考える。

具体的には、児童が積極的に自分の意見を言うことができるようにするために、教師が説明をする時間をできるだけ少なくし、児童に計画を立てさせるようにする。例えば、(以下、省略)

与えられたテーマから話題を設定しており、どのような能力や態度を育成していったよいか

について、自分の考えを述べている。しかし、その理由や背景が述べられていないことからレベル2とした。

特別活動は、学校生活の満足度や、楽しさと深くかかわっているが、他方、それらが児童の能力や育成に十分につながっていない状況も指摘されている。私は、これらを小学校学習指導要領解説特別活動編に示されている、2つの教育意義を示し、それらの状況に対する解決策を述べようと思う。

小学校学習指導要領解説特別活動編には、特別活動の教育意義の1つ目に、集団活動を特質とすることとある。(以下、省略)

小学校の特別活動における課題と、その改善策を述べようとしている点では、テーマを受けていると捉えられるが、教育的意義を述べようとしている点で、レポートの内容が十分整理されていないと捉えられることからレベル1とした。

(2) 評価規準「自分の考えをもち、その考えを支える情報を踏まえ、最終的な結論を導いている」

学校生活や社会生活の中で共存していくための能力や態度を育てていくために、子どもたちが自分たちで自分たちの問題を考え見直していったり、個人の目標や学級での目標を掲げてその目標を達成するための方法を考えていったりするなど、自分自身で考える活動と周りの人たちと共有し合う活動を重視していくべきだと考える。そして、教師は子どもたちが自分たちで問題や目標を見つけて自分たちで問題解決や目標達成へと導いていくための問いかけやサポートをしていくことが大切であると考えます。

どのような活動を重視していったらよいかについて、自分の考えを述べているが、自分の考えを支える情報が述べられていないことから、レベル2とした。

そこで何をしたらそういった力が身につくか考えた結果、一番容易なのは本を読むことではないだろうか。(以下、省略)

どのような活動を重視していったらよいかについて、自分の考えを述べているが、レポート課題で「小学校の特別活動において」どのような活動を重視していけばよいかとなっているため。本を読むことはそれに当たらないことから、レベル1とした。

(3) 評価規準「自分の考えを支える情報(資料や根拠)を適切かつ効果的に選択し、論理的に自分の考えを述べている」について

2つ目は縦割り班活動である。私がかつて通っていた小学校では縦割り班活動を積極的に行っていた。例えば縦割り班集会や縦割り班対抗の大縄跳び大会があった。特に縦割り班集会で当時6年生の私が同じ班の1年生に優しく接していたら、集会が終わる間にその1年生から感謝の言葉をかけてもらったことがある。当時下級生と接することをとても苦手としていた私にとって、最学年としての役目を果たせたという嬉しさや喜びがとても大きかった。このように縦割り班活動は、(以下、省略)

ループリックでは、自分の考えを支える情報に自分の考えを支える情報として自らの体験も含むとしていることから、自分の考えを支える情報は述べられているが、自らの体験のみでは、レベル3の「情報を適切かつ効果的に選択し」には当たらないと捉え、レベル2とした。

この「楽しさ」の違いから、今日における特別活動で育成すべき能力は「自らの問題として捉え、社会で逞しく生きる力」であり、態度は「主体的に自ら実践しようとする態度」であると考えた。外面的な「楽しさ」によって児童は窮屈になっているのだ。なぜなら、教師から与えられることばかりだからだ。私が育成すべき能力や態度で強調すべきことは、「自ら」ということである。教師が与えるばかりの存在であると共に、更に私が注目したのは学校自体が開かれた「公共施設」ではないということだ。(以下、省略)

「児童は窮屈になっているのだ」「教師から与えられることばかりだからだ」「教師が与えるばかりの存在である」と断定的に述べる場合には、それを裏付ける情報が必要であると捉え、レベル2とした。

第二に、それを育成させる為に重視することについて考えた。まず個性を生かすという部分に関しては、運動会や発表会などの行事で学ぶことができるのではないかと思う。勉強が苦手でもスポーツが得意、スポーツが苦手でも歌が得意といった児童達には個性を発揮しやすい行事ではないかと思う。個性を生かすということは、お互いを認めあうということでもあるのではないだろうか。(以下、省略)

自分の考えを支える情報としては、情緒的ではあるが、自らの体験を述べたものと推測されること、自分の考えを支える情報の意味は取り違えていないことから、レベル1とした。

(4) 評価規準「話題の選択から結論に至る過程を的確に説明している」について

私は今後の小学校の特別活動において、集団活動を通して学ぶという態度をさらに育てていく必要があると考える。なぜなら、高学年になるにつれて少人数で仲良くグループが形成されるようになり、学級の中で上下関係が生まれていると感じるからである。(中略)そこで、特別活動に関する物事を決める際には、全体で話し始めるのではなく、席で決める生活班での話し合い活動を増やして一人ひとりが自分の意見をきちんと言えるような環境を作ってから全体で共有するようにすべきであると思う。また、その話し合い活動の中で一人一役役割を作ることで、自分に自信がもてない児童も自分は参加できているということをさらに実感できるのではないかと考える。このように考えるのには学校での活動ではないが次のような理由がある。(以下、省略)

文章の内容が育成したよい能力や態度から、その能力や態度を育てるためにどのような活動を重視していけばよいかに移っているが、段落が設けられていないという問題が見られる。

そのため、年齢に応じて内容を変える必要があり、発達段階をしっかりと把握しておくことが不可欠であると思った。私は、児童の態度や能力を育成、向上させるためにはなにより親の協力が要ると考える。(以下、省略)

一文目と二文目がつながっていないという問題がみられる。

このような文章上の問題が、レポートの内容に与える影響によってレベルを決定した。

(5) 評価規準「文法に沿った正しい日本語を用いて適切にレポートを作成している」について

この観点については、次のような問題が見られ、その状況によってレベルを決定した。

- ・引用文献を記述していない、若しくは正しく記述していない。
- ・引用した箇所を示していない。
- ・「いろんな」「ちゃんと」等の話し言葉や、「みやすい」等の方言が見られた。

	課題に対する内容	論理的な説明	文章表現	
観点の説明	与えられたテーマから疑問や問題を定めている	自分の考えをもち、その考えを支える情報を集め、最終的な結論を導いている	文法に沿った正しい日本語を用いて適切にレポートを作成している	
レベル3(4)	与えられたテーマから自分の話題を設定し、その問題をとり上げた理由や背景について明確に述べている	自分の考えを支える情報(資料や根拠)を適切かつ効果的に選択し、論理的に自分の考えを述べている	話題の選択から結論に至る論理的な組み立て、記述の順序、段落のつながりが整っている ・主題と述語の対応が適切である ・誤字や脱字、仮名遣いの誤りがない ・引用した箇所が分かり、レポートの最後に引用文献を記載している	
レベル2(3)	与えられたテーマから自分の話題を設定しているが、その問題をとり上げた理由や背景の内容が不十分である	自分の考えを支える情報は述べられているが、自分の考えを支える情報の考察が不十分である	話題の選択から結論に至る過程はおおむね整っているが、記述の順序や段落のつながりに問題がみられる ・主題と述語の対応が適切でない箇所が発見される ・誤字や脱字、仮名遣いの誤りが散見される ・レポートの最後に引用文献を記載している	
レベル1(2)	与えられたテーマから自分の話題を設定しているが、その内容が十分に整理できていない	自分の考えや最終的な結論が明確に述べられていない	自分の考えを支える情報(資料や根拠)が十分に示されておらず、論理的に自分の考えが述べられていない	
レベル0(1)	与えられたテーマから自分の話題を設定されていない	自分の考えや最終的な結論が述べられていない	自分の考えを支える情報(資料や根拠)とは、授業で用いたテキスト、大学、文部科学省等の公的機関、学会、各種団体、新聞等からの情報、さらには、自らの体験を含む	
備考			話題の選択から結論に至る過程に問題がみられる ・主題と述語の対応が適切でない箇所、誤字や脱字、仮名遣いの誤りがみられ、理解が難しい ・レポートの最後に引用文献を記載していない ・字数の下限が守られていない	
評価	2	3	3	3

担当教員から
 テーマの吟味、何を扱おうとしているかをレポートの最初に明確に示す。レポートの内容がもっと分かりやすく整理する。

図2 評価結果

8.3 学生への評価結果のフィードバック

学生への評価結果のフィードバックは、第15回(平成28年1月20日)の授業の終末で行った。レポートを提出した学生に個別の説明として、図2「評価結果」、図3「朱書きをしたレポート」を配付した。また、学生全体への説明として、図4から図9の「説明用 PowerPoint シート」を使って説明を行った。さらに、授業終了後個別の質問等を受け付けた。

学生全体への説明の具体的な内容は次の通りである。

まず、今回のレポートではテーマに沿った内容になっていないという問題が見られたため、図4、図5のシートを示して、テーマの吟味の必要性について説明した。

次に、今回のレポートでは自分の考えを支える情報が1つの文献であったり、自分の体験のみであったりするレポートが目立ったため、図6のシートを示して、複数の情報を取り上げることによって、説得力のある内容とするよう説明した。

また、分かりやすい文章とするため、図7、図8のシートを示して、ナンバリングを用いたり、適切に段落を設けたりしている例を紹介した。

さらに、図9のシートを示して、引用文献を記述する意味とその方法について事例を挙げながら説明をした。

9 評価結果とその考察

レポート提出者は72名で、ルーブリックを用いた評価結果は図10から図15のとおりであった。図10は、各レベルを点数化し、その合計点の分布を表しており、平均点は16.7点であった。図11から図15までの各評価規準におけるレベルを点数化し、その分布を表したものである。各評価規準の平均点は図11から順に3.1点、3.4点、3.2点、3.4点、3.5点であった。

テーマの吟味

小学校の特別活動において、

- 1 どのような能力や態度を育成していったらよいか
- 2 その能力や態度を育成するためにどのような活動を重視していけばよいか

あなたの考えを述べなさい。

図4 説明用 PowerPoint シート

テーマの吟味

【惜しい事例】

- 能力や態度について述べているが、その理由や背景が述べられていない
- 特別活動以外の活動を述べている
- 自分の考えが述べられていない(学習指導要領が示していることだけを述べている)

テーマをよく読み込み、何について書いてほしい(答えではない)と言っているかをつかもう

図5 説明用 PowerPoint シート

論理的な説明

【参考にした事例】

- 私は、異学年の子どもが交流する活動を重視したらよいと考える 結論
- なぜなら、私がボランティアで行っている学校では、……しているからである 根拠1(体験)
- このことについては、学習指導要領でも「……」と述べられている 根拠2(文献)
- したがって、……する力を育成するために、交流活動を重視したらよいと考える まとめ

図6 説明用 PowerPoint シート

分かりやすい文章構成例

• 私が、今後特に育成したらよいとする能力は2つある。1つは……、もう1つは……である

• なぜなら、…… だからである

能力や態度

↓

• その能力を育成していくために重視したい活動は2つある。1つは……もう1つは……である

• なぜなら、…… だからである

重視したい活動

図7 説明用 PowerPoint シート

分かりやすい文章構成例

• 私が、今後特に育成したらよいとする能力の1つめは……である。なぜなら、……

• そのために、……活動を重視したらよいと考える。なぜなら、……

同じパターンの繰り返し

• 私が、今後特に育成したらよいとする能力の2つめは……である。なぜなら、……

• そのために、……活動を重視したらよいと考える。なぜなら、……

図8 説明用 PowerPoint シート

引用文献

特別活動にかかわって、子ども達は、情報化、都市化、少子高齢化などの社会状況の変化を背景に、生活体験の不足や人間関係の希薄化、集団のために働く意欲や生活上の諸問題を話し合っ解決する力の不足、規範意識の低下などが顕著になっており、好ましい人間関係を築けないことや、望ましい集団活動を通した社会性の育成が不十分な状況にあると述べている

誰が？何を？

引用文献を明記するのは最低限のマナー

図9 説明用 PowerPoint シート

点であり、図14、図15のとおり4点、すなわちレベル4が最頻値となっていることから、同様の印象を受ける。一方で、本学のCOMMONルーブリックが1年次から4年次までの学生を対象としていることを考えると、今回、対象とした学生が2年次後期の学生で、やや高いという印象を与える評価結果も1年次から学修の積み重ねの成果であると言えなくもない。

こうした状況を改善し、教育の質を保証するという点から考えると、次のような改善を検討する必要

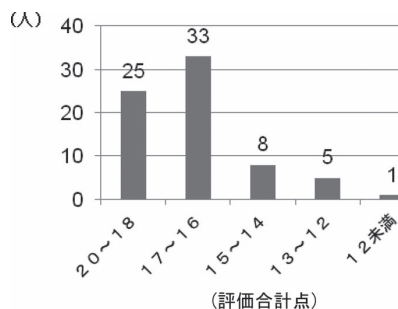


図10 評価合計点の分布

広島文教女子大学におけるコモンルーブリック開発と実践的展開

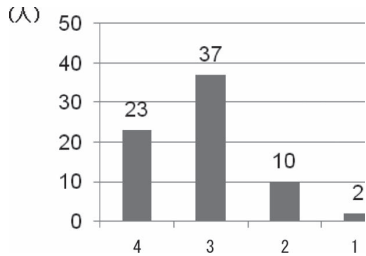


図11 「課題に対する内容1」の評価の分布

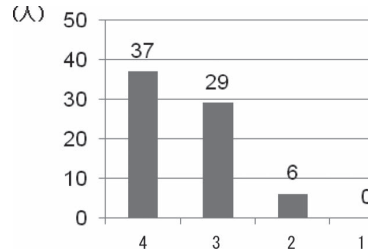


図12 「課題に対する内容2」の評価の分布

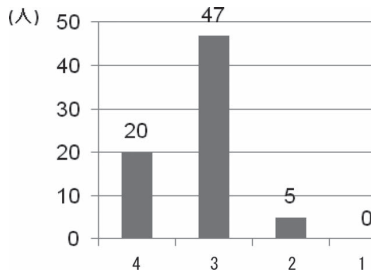


図13 「論理的な説明」の評価の分布

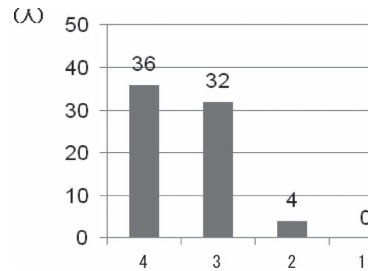


図14 「文章表現1」の評価の分布

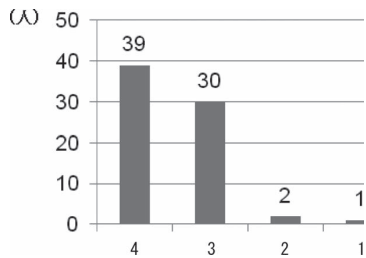


図15 「文章表現2」の評価の分布

(注) 図11の課題に対する内容1は「与えられたテーマから疑問や問題を見いだしている」を、図12の課題に対する内容2は「自分の考えをもち、その考えを支える情報を踏まえ、最終的な結論を導いている」を、図14の文章表現1は「話題の選択から結論に至る過程を的確に説明している」を、図15の文章表現2は「文法に沿った正しい日本語を用いて適切にレポートを作成している」を指している。

があると考える。

- ・卒業研究のルーブリックとの系統性を持たせながら、下学年用と上学年用のコモンルーブリックを作成する。
- ・学年に応じて、各評価規準に重みづけをする。

図11から図15を見ると、図11と図13が同じような分布となっていることが分かる。この要因として考えられるのは、コモンルーブリックをローカライズする際に、観点「課題に対する内容」の記述語を「レベル3 与えられたテーマから自分の話題を設定し、その問題を取り上げた理由や背景について明確に述べている」、「レベル2 与えられたテーマから自分の話題を設定しているが、その問題を取り上げた理由や背景の内容が不十分である」とし、観点「論理的な説明」の記述語を「レベル3 自分の考えを支える情報（資料や根拠）を適切かつ効果的に選択し、論理的に自分の考えを述べている」、「レベル2 自分の考えを支える情報（資料や根拠）を示し、論理的に自分の考えを述べている」としたことによって、いずれの観点でも自分の考えを支える理由や背景を求めることとなったことが挙げられる。このことは、1つの事象、この場合学生のレポートのある記述が2つの観点に影響したものと考えられ、改善を要するものとする。

具体的には、次のような改善が考えられる。

- ・ルーブリックの記述語を変更する。
- ・コモンルーブリックの観点「課題に対する内容」の説明「考察がなされている」と、観点「論理的な説明」の説明「探究がなされている」の解釈を明確にする、若しくは記述を変更する。

10 質問紙調査の結果とその考察

今回の実践では、学生への評価結果のフィードバックを行った後、次の内容について質問紙を行った。

- ・質問1「目標（何に取り組んだらよいか）をもつことができた」
- ・質問2「到達度（何ができていて、何ができていないか）が分かった」
- ・質問3「今後の目標（何に取り組んだらよいか）をもつことができた」
- ・質問4「今後の学修への意欲が高まった」

なお、回答方法は無記名で「1 あてはまる」「2 おおむねあてはまる」「3 あまりあてはまらない」「4 あてはまらない」の選択肢から選択することとした。また、質問紙調査の終わりに「レポートの評価について、あなたの感想や意見を聞かせてください。」という自由記述欄を設けた。

回答者数は欠席者、レポート未提出者がいたため、66名であった。

図16から図19に示した結果から、今回の実践が学生から肯定的に捉えられていることが分かる。

その要因は、コモンルーブリックを作成し、学生に説明したこと以上に、学生へ評価結果をフィードバックしたことにあると考える。

質問紙調査の自由記述欄には次のような記述が多く見られた。

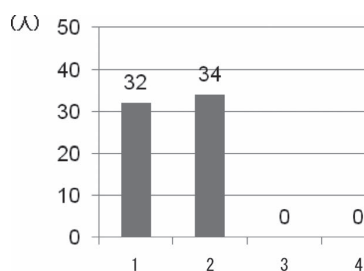


図16 質問1の回答の分布

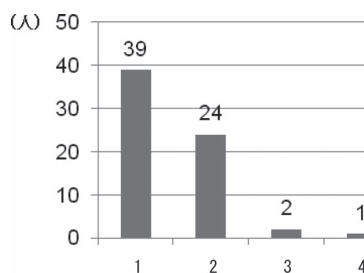


図17 質問2の回答の分布

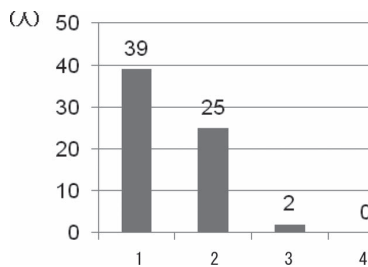


図18 質問3の回答の分布

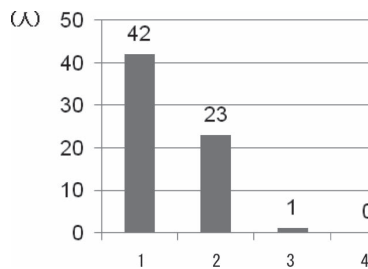


図19 質問4の回答の分布

しっかりと基準が示してあったので、何をどうしたらよいか分かったし、きちんとフィードバックがあったので、納得が이었습니다。

大学のレポートは朱書きされて返ってくることは少なく、どこを直したらよいか分からないことが多かったのですが、今回朱書きをさせていただいて、直すべきところも分かり、すごくよかったです。

こんなに丁寧に評価をしてもらったことはありません。大体のレポートは返却されませんし…。小学校の時のように、先生からのコメントがあったらやる気がでます。

ほめるべきことや言うべきことは、やはりきちんと評価し、伝えることが必要だと思いました。

自分ができていないところが明確に分かってよかった。良い所は良いと書いていてくださったので、そこは自信をもって取り組んでいきたい。また、他の人の例があったことで、何をどのように書けばよいか分かったので、今後参考にしたいと思った。

こうした記述から分かるように、今回の実践では、学生への評価結果のフィードバックが行われたことによって、多くの学生が今後の目標（何に取り組んだらよいか）をもつことができ、今後の学修への意欲が高まったと言える。

一方で、学生の肯定的な受けとめはコモンルーブリックが開発され、それが学生に示されたことによるものかどうかは、現在のところは明らかではない。なぜなら、対象の学生は初めてコモンルーブリックを用いたレポート評価を体験し、他の授業においてもコモンルーブリックが用いられるかどうかは分からないからである。

今回の実践によって一時的ではあるにせよ高まりを見せた学修に対する意欲を維持・向上させていくためには、今後組織的・継続的な取組が行われるか否かにかかっていると見えよう。

11 ま と め

今回の実践を通して見えてきたコモンルーブリックを用いた評価の改善・充実の方向性について述べ、本稿のまとめとする。

学生の学修意欲の向上を図るという面から考えると、コモンルーブリックを用いた評価が単独の科目にとどまるのではなく、カリキュラムのなかに構造的・体系的に位置付けられて行われることが求められる。また、その際には「学生に対するルーブリックの説明→評価→評価結果のフィードバック」という連続的な取組が必要となる。

こうした取組を進める一方で、評価の信頼性、妥当性を担保するために、次のような課題に取り組んでいく必要があると考える。

- ・実践に基づくコモンルーブリックの改善
- ・ローカライズの方法等ルーブリック作成のための研修、評価者間の誤差を調整するための研修の充実

コモンルーブリックを用いた評価は授業評価の一方法であるが、組織的な教育が求められているなかで、教員の同僚性を高めるという面からも全学的な取組としていきたいものである。

【引用文献】

- ※1 文部科学省中央教育審議会答申（2012）, 「新たな未来を築くための大学教育の質的転換にむけて」.
- ※2 杉森公一（2014a）, 「ルーブリックが結ぶ教育接続（1）：ルーブリックとは何か」, 文部科学教育通信335, p 14-15. ジアース教育新社.
- ※3 松下佳代（2012）, 「パフォーマンス評価による学習の質の評価：学習評価の構図の分析にもとづいて」, 京都大学高等教育研究（18）, p 75-114.
- ※4 松下佳代（2012）, 「前掲論文」.
- ※5 橋村勝明（2014）, 「GPAの実効化に向けた方法試案—広島文教女子大学の実態調査を通して—」, 広島文教女子大学教職センター年報（2）, p 1-9.
- ※6 今崎浩（2015）, 「広島文教女子大学におけるルーブリック評価の導入について—成果と今後の課題—」, 広島文教女子大学高等教育研究創刊号, p 25-41.
- ※7 松下佳代（2012）, 「前掲論文」.
- ※8 橋村勝明（2013）, 「カリキュラムマネジメントの方法と実践—広島文教女子大学における取組を通して—」, 広島文教女子大学紀要（48）, p 1-11.
- ※9 杉森公一（2014b）, 「ルーブリックが結ぶ教育接続（9）：学生と教師を結ぶアクティブ・ラーニングとルーブリック」, 文部科学教育通信346, p 32-33. ジアース教育新社.
- ※10 文部科学省中央教育審議会答申（2014）, 「新しい時代にふさわしい高大接続の実現に向けた高等学校教育, 大学教育, 大学入学者選抜の一体的改革について」
- ※11 杉森公一（2014b）, 「前掲論文」.
- ※12 例えば関西国際大学のルーブリックは, 導入が早かったこともあり, すでに何度か見直しを図られ, 改訂されるごとにバージョンアップされている.
- ※13 成瀬尚志（2013）, 「レポート評価において求められるオリジナリティと論題の設定について」長崎外大論叢（18）, p 99-108.
- ※14 松下佳代（2014）, 「学習成果としての能力とその評価—ルーブリックを用いた評価の可能性と課題—」, 名古屋高等教育研究第14号, p 243-245.

【その他参考文献】

- ・高浦勝義（2012）, 「絶対評価とルーブリックの理論と実際」, 黎明書房.
- ・杉森公一（2014c）, 「ルーブリックが結ぶ教育接続（2）：大学教育を取り巻く教育接続の課題」, 文部科学教育通信336, p 20-21. ジアース教育新社.
- ・杉森公一（2014d）, 「ルーブリックが結ぶ教育接続（13）：ルーブリックが結ぶ大学教育の未来」, 文部科学教育通信350, p 18-19. ジアース教育新社.

—平成28年1月22日 受理—